

## 石垣原の戦闘（二）

「郷土戦史の研究」昭和二・十一・十五

帝国在郷軍人会大支部編

## 三、石垣原第二会戦

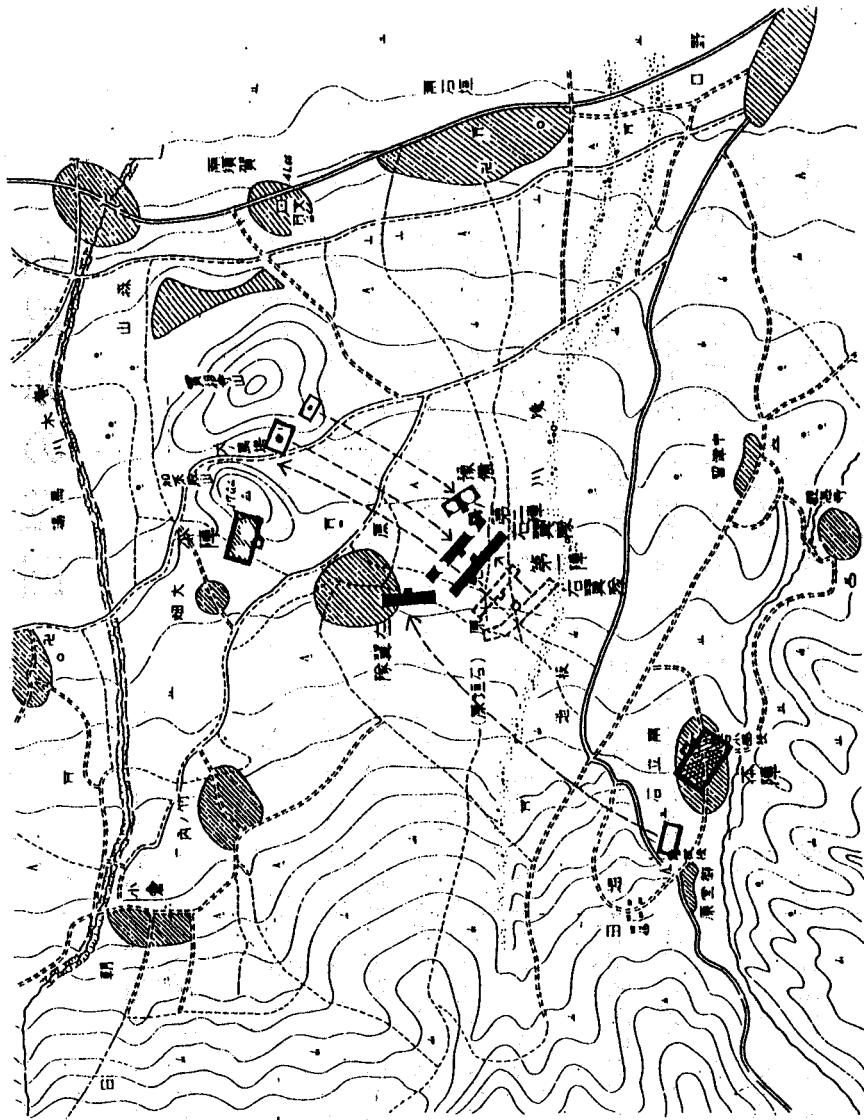
黒田軍第二陣の将久野治左衛門は、時に年十九歳であった。友軍の第一陣の敗退するのを見て大いに憤慨し、第一陣に続いて追撃中の吉弘統幸の軍を逆襲せんとす。これを見て大友の第二陣宗像鎮次は部下五百余騎を以てこの戦闘に加入し、ここに両軍の大混戦が始まった。

久野治左衛門は身を挺して敵陣に突入せんとするので曾我部五右衛門はこれを制して、「今や敵が勝ちに乗じて居る時であるから、暫らく守勢に立ち敵の疲れるのを待つて攻勢に転ずべし」と言った。けれども久野はこれを聴かずして跳り出たので、曾我部も続いて大友の兵の中に突入した。

久野治左衛門は敵十七人を斃した。十八人目に宗像鎮次を斃したが、鎮次の部下の為に討たれ、その部下の大部戦死した。曾我部五右衛門も奮戦の後都甲兵部と差し違えて死んだ。かくして両将の戦死は黒田軍の第二陣を大混乱に陥し入れた。

如水方竹中伊豆守の士大将に久野治左衛門と云者一軍して諸人に目を覚させんと、七百余騎鶴見原に打て出る。宗之に渡り合散々に攻戦。然るに治左衛門は馬口強くして宗之が陣に駈

# 石垣原第二會戰要圖



附圖第九

N  
16,000

備考

- |  |      |  |
|--|------|--|
|  | 第一時期 | 〔大久重三軍陣ノ遺跡<br>堀田重三軍陣ノ遺跡<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り〕       |
|  | 第二時期 | 〔大久重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り〕 |
|  | 第三時期 | 〔大久重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り〕 |
|  | 第四時期 | 〔大久重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り<br>堀田重三軍陣ノ遺跡ノ入り〕 |

入けるを、木部左助渡り合て取て押へ首掻落し云々。〔増補大友興廢記中速見郡真玉庄住士田北弥太郎説〕

于レ時黒田之二陣久野治左衛門憤ニ一陣敗走ニ忽馳ニ向于大友二陣ニ血戦及ニ數刻之處雖レ成  
負色ニ久野聊不レ退ニ彌切ニ入于敵陣ニ討ニ取数人ニ之後被レ取ニ籠於大勢ニ遂戦死生年十九歳  
也曾我部亦切ニ入敵陣ニ與ニ宗像掃部ニ指違畢  
〔太宰管内志〕

曾我部功者なる故、如水軒より久野が後見として指添られけるが、久野が深入するを見て危  
しと制しけれども聞入らずして討死す。是に因て曾我部やむことを得ずして久野と一所に討死  
せり。久野が討死の時、家人とも其左右に在て戦ひしが六人の者皆一所に討れぬ。何れも三  
十に足りぬ若武者なりしとなり。云々  
〔今本九州記〕

実相寺山の南の突角にあつた予備隊は、第二陣の危きを見、山を下つてこの戦闘に参加した  
けれども、是亦大なる損害を受け戦勢を挽回することが出来ず、旧位置にに後退し辛うじて実  
相寺山を保持している。

今や黒田軍は第一、第二陣共に潰え、予備隊も亦一旦戦線に加入したが、これもまた撃破せ  
られ辛うじて実相寺山を保持している状況にある。

大友軍の將吉弘統幸は、一時現在地に於て隊伍の整頓を図りながら、爾後の攻撃を準備中である。

#### 四、石垣原第三会戦

大友義統は立石からこの状況を見て、統幸に現在地を撤退すべきことを命じたが、統幸は最初から戦死を覚悟していたので、その命に従わなかった。そこで、義統は吉弘を討たすなとて救援の為にその麾下から四、五百人を増派した。

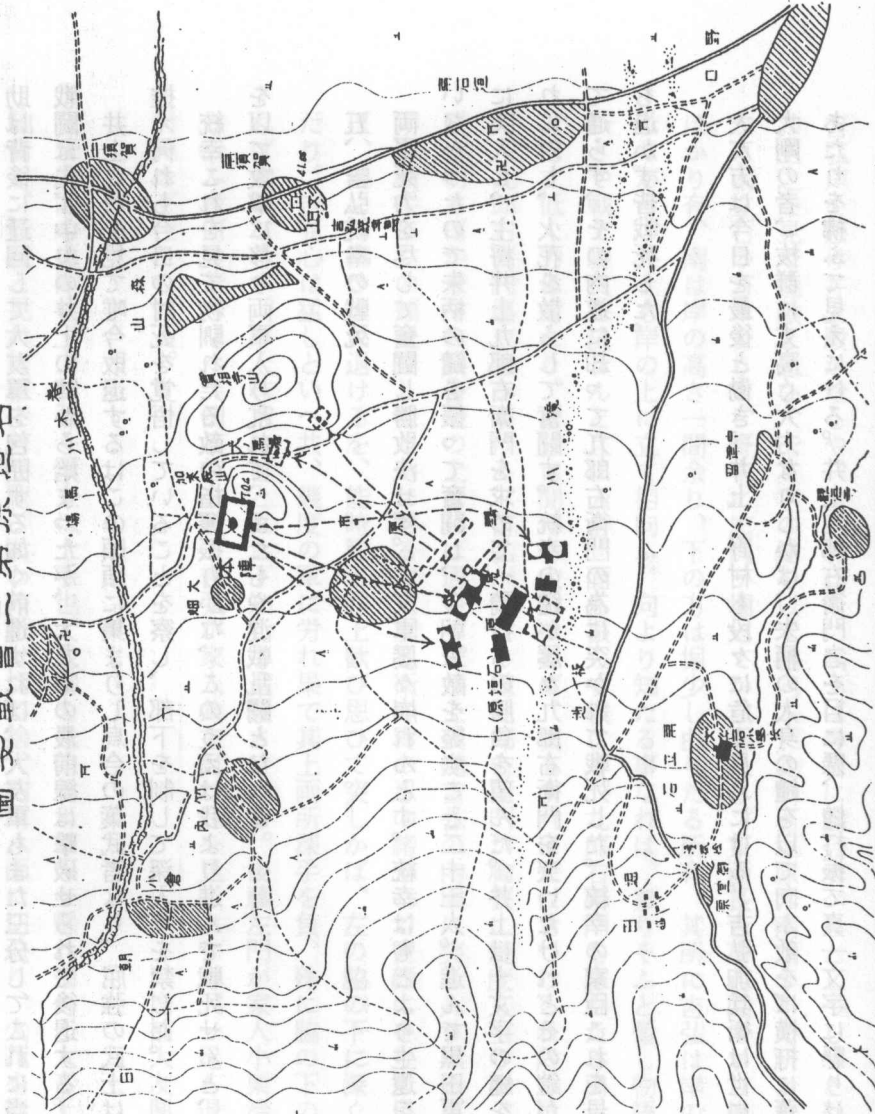
これより先、黒田軍の主將井上九郎右衛門は野村市右衛門、後藤左門と共にその主力を角殿山の北側に置き、自ら山上に於て大勢を見ていた。第一、第二陣共に破られ松井、有吉の部隊も破られるのを見ていながら、なお冷静に戦機の熟するのを待っていた。今や大友軍は石垣原の芝生に座って扇を使って息をついているのを見て、機到れりとなし、部下に下馬を命じ攻撃前進に移った。

大友方は芝生に座して扇を遣ひ休みいたり。井上是を見て味方の勢を招きよせ、兵共に下知しけるは、余の敵にて候はば、馬にて馳散すべけれ共、此者共は今日討死と思立、屈強の物馴れたる老巧の者共なれば暫く敗り難し。皆々馬より下り立、鎗の端金の抜けるほど戦へよと下知しける。

〔増補大友興廢記〕




井上九郎右衛門は全兵力を三分し自ら正面の軍を指揮し、野村市右衛門は西方より後藤太郎

# 石垣原第三會戰要圖



附圖第十

## 考 據

-  示分隊之參加了部隊
-  第三師團 (龍田、大野、大友、及統)
-  第一師團 (吉田、津島、及後援隊、區、不、重、龍田、及統)

助は背後に迂回して大友軍を包围する如く前進すれば、大友軍もまた三分してこれに当たる。戦闘は先ず中央の井上の陣から始まったが、大友軍の最前線は撃破せられて後退する。

井上これを見て唯今敗退するはこの頃頃に集まりし烏合の葉武者なり。屈強の武士は後方に控え何れも今日の討死を覚悟していることを察し、部下を制して深入りを禁じた。

統幸これを見て物馴れたる敵の指揮振りかな、このうえは我より進んで戦死せんと、二千人を以て攻撃に移り両軍入り乱れて、またもや混戦乱闘となった。

##### 五、吉弘統幸の戦死

両軍死力を尽して奮闘し勝敗決せず。大友軍屢々崩れんとす。統幸はもとより生還を期していなかったので朱柄の鎧を振って奮闘し、今朝来敵を斃すこと二十三人。進んで黒田軍の主力に突入し、主将井上九郎右衛門を求めて一騎打ちの勝負を望んだ。井上は十文字の鎧を以てこれに對し、火花を散らして奮闘す。統幸の鎧が屢々九郎右衛門を突いたけれどその鎧が堅くして通らず、その内遂に却って九郎右衛門の為に突かれて戦死した。統幸の家臣これを見て一足も退かず皆戦死した。

大友方は今日を最後と働き、井上・野村も段々に危く見えにける。吉弘加兵衛は世に聞えし大剛の者、抜群に丈高く大力なりしかば、朱柄の自身の鎧を以て向ふ敵をば横打に薙倒し、あたりを拂ふて見えにける。井上九郎右衛門之を目に懸、鎧打振て真一文字に懸りけるに、

吉弘声を懸け井上殿か珍しや、吉弘加兵衛に候へば尋常に参会すべしとしづしづと近よる。井上之を見て能敵と思ひ、十文字の鑓を以て馳向ふ。此所石垣原の南北の半の所より四丁ばかり南立石の方によりて、野中に忠内ヶ堀とてから堀あり。東西長き事百間ばかり横は三間ばかり有、南は岸の高さ一間余り、下の方は堀少し曲りたる所有。其所に吉弘は岸の上に立ちながら、井上も岸の上に立て相向ふ。向より知たる事なれば、参りそふと暫し物語りし、いざや戦て勝負を決せんと互に云合せ面も振らず戦ける。九郎右衛門も勝れたる勇士成しかども丈低く力は劣たり。吉弘は聞ゆる大力なれば、稍もすればたたきつけられ危く見えし所に、九郎右衛門運や強かりけん。吉弘が突ける鑓九郎右衛門が胸板に幾度も当りて、鎧の毛所々切るばかりなれ共皆鎧の上なれば通らず。井上の鑓吉弘の内甲に突き入りけるに、十文字の横手に左の頬先をしたたかに懸るに、加兵衛の冑の忍の緒きれて冑顔にをりて目を覆へば、猥に打拂ひ後に退けるを、能時節と井上歎び思ひて突しかば、左の脇の下に深く突入りたり。吉弘心は猛しといへ共、幾度の軍に勞れ果て其上両所深手を負、殊に脇の下の疵痛ければ働事ならず。井上味方に首とれと下知して追懸させける。後藤左門が家人小栗治左衛門と云ふ者何の苦もなく突倒し首を取。吉弘が家人共主討れしを見しよりも、一足も退かず皆討死をぞ仕たりける。

〔増補大友興廢記〕

元来宗之心は剛也。力は強く軍立は上手也。我働を見物せよや人々懸れ懸れと大音上げ大勢馳合せ、能敵と見れば組で首を取。あわぬ敵は切て捨、四角八面に切迫り、火花を散じ戦し

が、面に向む武士廿四人を切伏せをもつかず追詰々々馬人の嫌なく向ふ者を真つ向たて割、逃る者の押鳥母衣時あたるを最後と切て捨、爰を先途と働けり。敵大勢なれ共唯一人に切立られ散々に逃散て、近付くものなかりける。吉弘暫く息をつき我身体を見てあれば、痛手薄手を七箇所迄手を負ひて働自由ならざれば、今は是迄と思ひ、極め小高き所に大石の有けるを、是我が自害の場所なりと、つと立上り上帯切てかしこに投捨、腹十文字に掻切てこそ失にける。天晴よき自害やと貴賤是を感じける。家人戸右衛門と云者介錯して死骸を肩に引懸本陣に引き帰。

〔増補大友興廢記中速見郡真玉庄住士田北弥太郎説〕

吉弘是を見て石上に立揚り、長刀を振り回わして井上を目掛て突てかかり、散々に切立前後左右を切立て追回て、向ふ敵も無きが如くに働きたれど、周身諸處に疵を負ひさすがに猛き雄将なれど心身共に疲れ果て、一段高き所に跳り上りて、大音揚げ吉弘鑑能此こに在り、我が首取て功にせんよと腹十文字に掻切て死したりける。

〔豊州乱記〕

宗行依為<sup>二</sup>大剛者<sup>一</sup> 猶立<sup>二</sup>直備<sup>一</sup> 合戦不<sup>レ</sup>怠 宗行目<sup>二</sup>掛井上 馳合向<sup>二</sup>立空堀兩岸云々<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>鎗決<sup>二</sup>勝負<sup>一</sup> 井上遂突<sup>二</sup>伏宗行<sup>一</sup> 畢

〔太宰管内志〕

吉弘向敵廿七騎切伏遙に退き我身を見れば、痛手薄手九ヶ所負けり。是迄と思ひ小高き所に掛より黒田殿の内に我と思はん者は吉弘が首取勲功に預れとぞ呼びける。去共最前の手並み



見て左右なく近付者はなし。かかりし所に後藤太郎助生年十六歳此由を見るよりも、如何に吉弘鬼神にもせよ討取功名せんと、種ヶ島に二つ玉籠て吉弘が弓手の脇を打通。小栗次右衛門、小山の陰より走出吉弘が首を取、生年三十八。  
〔石垣原合戦覚書〕

吉弘統幸の戦死は実に此の互角の戦闘に最後の決を与えた。大友軍は遂に潰走に陥り残兵八十余騎立石方面に敗走に移れば、黒田軍はこれを追撃して大勝を得た。

この戦闘に大友軍は戦死百六十四人、黒田軍の戦死者三百八十五人。〔増補大友興廢記による 黒田家の記録では大友軍の戦死五百余騎、黒田軍の戦死百四十六とある〕

黒田方三百八十人討死す。大友方百六十人討死す。黒田方始は小勢なりと雖加勢加つて大勢と成る。大友方初は大勢なりといへ共近国の加勢はなし。或は討死し或は落失せ、残る八十人立石に引退く。  
〔豊西記〕

三、両軍戦死者の主なるもの次の如し。

大友方将士

吉弘嘉兵衛統幸

宗像掃部介鎮次

衛藤又左衛門

血杵主膳

吉良傳右衛門

竹田津志麻守

大神監物

小田原又右衛門

佐藤勘介

柴田治左衛門

岐部山城守

深栖七左衛門

江田民部

竹田依之進

大賀丈之助

柴田小六

廣林下野守

都甲兵部少輔

黒田方将士

栗山四郎左衛門

野林市右衛門

森 太郎兵衛

黒田伯耆守

黒三四郎

井上九郎左衛門

黒田惣衛門

大賀三郎右衛門

井上六衛門

船川刑部

小林甚右衛門

原 弥左衛門

船川市蔵

三宅利右衛門

細 弥平太

山脇權之助

小林治右衛門

曾我又左衛門

中野玄哲

小栗治右衛門

母里與三郎

時枝平太夫

池田九郎右衛門

光富籠右衛門

直田甚内

山本莊蔵

稗田九蔵

下田作右衛門

石田羽右衛門

松能藤三郎

山脇弥七

津田才蔵

大野勘左衛門

堀尾與右衛門

原田半三郎

曾我部五右衛門

森本五郎兵衛

飛田仁左衛門

小江弥七郎

本田半三郎

加賀野進右衛門

森 六太夫

後藤太郎介

大村六太夫

野村市右衛門

富来右兵衛

篠倉加兵衛

瓜田傳右衛門

二宮右馬介

大賀野甚右衛門

大賀野久太夫

久野甚介

氏野勘七

大賀野大学

#### 第四章 戦鬪後の状況

##### 一、黒田孝高実相寺山に達す

黒田孝高は、この日安岐城を発して南進中に石垣原の捷報を得て、夕方寺相寺山に到着して諸隊の部署を終り別府に位置す。この夜孝高は翌十四日を以て立石を攻撃すべく計画したが、風雨が強かったので十四日は主力を以て高地に沿って北方より、一部を以て中津留方面から立石を攻撃するの配置をとり敵を監視しつつ兵を動かさなかった。蓋し孝高の計画は敵を威嚇し降参させん為であった。十五日義統と姻戚なる母里太兵衛をして降参をすすめさせた。

大友軍が再び立石の本陣に退却して兵力を集結した時には戦死逃亡等で兵力を減耗し、士分八十雑兵を加えて二百人には足りなかった。義統は切腹しようとしたが、老臣田原紹忍の為に止められた。義統の部下には最後の血戦を主張するものもかなりあり、議論未だ決しない中に孝高の勸降使に接し、義統は遂に剃髪してこの夜母里太兵衛に従って孝高に降参した。

ここにおいて義統の部下四散し大友氏は滅亡を遂げた。

這般の消息に就いては、増補大友興廢記の中に、慶長六年八月速見郡真玉庄の住士田北弥太郎の手記として次のように伝えられている。

高連、義統の前に出申けるは、味方僅に相成り名有士八十騎ばかり、惣勢二百騎には不足、最早御陣も保ち難く候。御恩慮に任せ如何様にもはかり申すべしと申し付ける。義統仰せられけるは思慮に及ばず切腹より外はなしとぞ申ける。吉良傳右衛門懸出申けるは、萬死を出て一生を得るは名将の致す所まず一謀仕度候。義統其謀はいか様成事ぞと尋ねける。傳右衛門申けるは、曰杵惣六、宗像三次、中野主税、此三人を反逆の者に拵、今日討死仕候波津久多門の首を君の御首となし如水が陣に走り行き、此首を指出し反逆と名乗らは陣破れ申すべし。我々は跡より追懸三人を悪口し、空矢を射懸逃歸り申すべし。多門が人相義統公に少も違はず、小びんのあざのある迄能相似候へば、御首と見替申すべし。其隙に別府浦より御船に乗苦深々としつらひ、兵具を船の底に入、佐伯浦に上り、柁牟礼城に取籠り空旗數百立双へ佐伯一統御催し有るべし。さもあらば御恩の者共皆々馳集るべし。其の上戸次・原田・田原杯古き武士共を催し、柁牟礼籠城仕候はは、日本国が寄たり共暫く落城致すまじと申ければ、惣六・主税も懸出似首を差出し、如水に對面の時よくはからひ如水の首打落し早速去り歸るべし。時刻移りて益なしはやくと急げる。然處に田原紹忍罷出て此の計画不可也。若海上にて如水方追懸候はは御難儀不慮。之は唯如水に降參成され御命を全し、御子様方の行末御聞然るべしと申ける。傳右衛門眼に角を立て紹忍を白眼つけ、如何に禪門汝が様なる臆病者の及ふ所になし。唯引込て念仏申せと怒りける。中野驚申けるは、延々の詮議いらぬ事、今にも如水方寄せ来らば小勢にて如何なりと申す所に、吉岡源太芝居にいで唯今如水の陣より素肌武者一人、如水の使と呼り候と申上げる。義統の云、誰か有罷向尋ねよと

仰せける。 龜山左近、鎧脱捨駒引寄せ打棄、如水殿御両使御仮名如何と聞きければ、森左兵衛・中野玄 哲と申者也と答えける。義統使者に対面して、吉良傳右衛門取次にて口上の趣は、先頃も使者を以申越候處、一向無同心一戦に及候。先年高麗にて申合は、密にして旨趣御失念はこれ 有間敷候。此度和談成され如水に御仕せ然るべく候。末々の事はよきに申し成るべき成也。

此旨宜しく御達し成さるべしと申ける。義統、市萬田勸解由を召て身上の事如水に任する也と、如水が使者に渡すべしとて、書状一通認めて勸解由に御渡、則如水の使に渡しければ使者は帰りける。其後紹忍立出諸士の面々に義統申渡さるは、此度の戦場に粉骨を尽し候事感じ思ふ也。不運にて勝利なき事は天命也。身の事は如水に任せ豊前に下るなり。依之諸士不残暇を遣す也と申渡しける。皆々目と目を見合返答申者もなく少時在て臼杵惣六申けるは、  
 儲も悲しきこと共也。名有者五十騎今生の思ひ出に如水が陣に馳向ひ、花々敷軍して物清く討死せん。旁々如何にと云ければ、無念腹に居兼て皆尤と駒引寄々々打棄て、五十三騎鶴見原へ打て出たりける處に、不思議や高崎山の頂より黒雲一村引覆ひ、人の面も見別ねば闇夜の如くに成り電光頻り也。人々は神の告也とて馬より飛下り甲を脱ぎ、由原八幡宮に向て拜をなし誠に弓矢正八幡の御告也、いざや軍を止んと皆々別府の濱に出にける。中にも馬藤又右衛門、臼杵主膳、上野三之助、工藤忠摩、吉岡主水は関東に登り義乗に仕へんと東をさして落行ける。此戦に黒田方の討死二千六百三十七人、手負数三百八十五人。大

友方討死五 百三十一人、手負百十七人なり。敵味方三千七百六十八人の討死也。

この日は、実に関ヶ原大会戦の結末のついた日であった。

大友義統は孝高の為に中津に送られたが、孝高の斡旋によって死一等を減ぜられて常陸で終わった。

黒田孝高はこれから破竹の勢を以て豊後の諸城を圧服し、次で九州を略するに至った。

## 第五章 研究及教訓

### 一、大友義統の作戦

この戦闘に於ける両軍の総兵力については記録により一致していないけれども、大なる懸隔はなかった様である。しかしながら大友義統と黒田孝高との器量に於て著しい差異があった。

義統はその過去の戦歴に徴するに、優柔不断で時には怯懦な事があった。然るに孝高に至っては老巧にして果斷機を見る事頗る敏で到底義統の敵ではなかった。彼は義統の再興を判知するや直にこれまで中津に於て準備していた築城を中止し、当時関ヶ原大会戦の勝敗逆睹し難い時にあたり、疾風の勢いを以て殆ど全部が敵意を表している豊後に殺到した。当時の状況については諸記録にほぼ同様に残っているが、福本日南氏著「黒田如水」には、最も簡明直截に次の如く載せてある。

是より先如水遣す所の二使帰り来りて、義統の答旨を復す。如水曰く、先ず迎撃して義統を取らんと九日を以て全軍雷発の期と定む。老臣又諫め曰く、中原の大勢未だ定まらざるに、本城を空として軍を出したまふは、事早計に幾し、之に加へ九日は凶日なり。寧ろ暫く其期を緩め、上国最後の報を待ち、而る後攻勢を決せられんは豈萬全の道には非ずやと。如水頭を掉ひて曰く、徒らに上国最後の報を待たば、大事は定まり好機は逸去せん、且夫れ今の秋に当り座して其報を待ち而る後ち攻勢を決せん乎、内府之を何とか謂はん。爾等如水に觀望の誹を貽さんとする歟。兵は之危道なり。日の吉凶何かあらん。凶日を畏るる者は遺りて城に留るべし。如水は即ち発せんのみと。母里太兵衛友信剛直を以て部下に鳴る。如水の言を聴き目を瞋らして曰く、臣等忠貞を思ふが故に、所思を披瀝したるのみ。誰か凶日を畏れ主を棄てて、省みざるものあらんや、公の放言したまうも亦太しからずやと、口角沫を吐く。如水聴かざる為して、先ず盃を友信に属し順を以て列座の將士に賜ふ。出兵の議立ちどころに決し一軍勇躍せざるなし。

黒田孝高が急遽攻勢を取ったのは、実に義統に時日の余裕を与える事によって、その勢力を増大せしめない為であつて、井上九郎兵衛の指揮する先進梯団を挺進させたのは、益々其の企図を明にしたものである。

これに対して大友義統の作戦は遺憾ながら頗る消極的であつた。大友義統は差当りどうしても先ず黒田孝高を撃破しなければならぬ。然るにその孝高は倍数の優勢な兵力を以て近く相見

えんとしてゐるが、幸にして敵はほぼ我と同等の兵力を分離して派遣してゐる。義統の爲には実に絶好の機会である。もし義統にしてこの機会を失しては、他日又再び優勢な黒田軍に対して勝算はないのである。何故に義統は更に思い切つて積極的にでなかつたであらうか。もとより両軍の総兵力に於いては、大なる差がある。併し少なくとも大友軍として先ず敵の前線梯団を撃破したならば、後に孝高の主力と戦つて破れても尚瞑すべきであらう。

要するに大友軍が敗北したのは、諸種の原因があるけれど、主將の性格に負う所亦決して尠くないことと思われる。

然らばこの場合に於いて大友義統として作戰指導の根本方針は如何。

### 判決

敵の分離に乗じ各個に撃破する目的を以てその先進梯団に対して、果敢なる攻勢を取るを要す。

右の目的の爲に戰場を何れに求むべきやについては、義統が敵の先遣梯団の前進に関する情報を知つた時の模様によつて決定せられるべきもので、これに關しては何等詳細な記録がないが、少なくとも実相寺山、角殿山付近にその主力を結集し、各一部を里屋（亀川）及び鉄輪北方鞍部に出し、黒田軍の主力を索め、その里屋或いは鉄輪に前進するに乗じ、我が主力を以て之を攻撃することが必要であらう。

然るに義統は終始消極的で、唯一の攻撃の拠点たる実相寺山を無爲にして敵に与えた後に、



石垣原に出て戦いを求めたのは策の得たものとは言い得ない。

## 二、黒田孝高の作戦

孝高が赤根峠から杵築城救援の為、井上九郎右衛門の指揮する一部隊を出した時に、井上に對し杵築救援隊に於ける行動について、如何なる任務を与えたかの詳細は明瞭でない。併し當時の状況上孝高として国東半島の諸城を従える事もとより必要であつたけれども、速やかに杵築城を救援して、次で大友義統を攻撃することが更に急務であつた。蓋しこの度孝高出兵の動機は、義統に時日の余裕を与えない事にあつたことは、孝高が中津城を出発の時の決心によつても、はたまた富来城を包圍した時の処置に於いても明瞭である。

翌十一日の晩景に赤根峰を立つて、富来城の向八九丁此方の山に馬を立いれ、未明より諸勢悉く富来城を圍ける。其後如水は、濱の手より打迫り、伏兵なきかと見そなはし頓て堀近く迄寄給。留守居は垣見利右衛門、藤林九右衛門を始屈強の兵守り居たりける故、此體を見て即時には責落し難。又扱を入は隙入るべし。大友に勢の付ぬ先に一刻も早く押行へしと、其上木付城も心許無く、大敵に勝は小城は跡にて攻よきぞとて城を打捨押行ける。

〔増補大友興廢記〕

孝高が井上九郎右衛門に如何なる程度の信頼をしていたかは不明であるが、この状況に於いてその部下に一部を授けて、最も重要な方面に当て自ら主力を以て続行したのは如何であつ

てか。寧ろ最初から決心通りにするならば、一部を以て国東半島の諸城に当て、孝高自ら主力を率いて直路立石に向うか、少なくとも赤根峠から自ら主力を以て杵築を救援し、次に立石に進するのが適當であったと思われる。然るにその一部を梯進させたことは、一時危機を醸したと云わねばならぬ。何となればこの際大友義統が最初から積極的に行動したならば、或いはその先進梯団の勝算は必ずしも確實でなかったからである。

### 三、堅固なる決心し判断力の必要

#### 大友義統戦機を逸す

九月十三日に於ける大友義統の戦闘部署は、吉弘統幸の九百余騎を第一陣として宗像鎮次の五百余騎を第二陣とした。この両隊が逐次戦闘に加入して敵を撃破し、後義統は更に四、五百騎を以て第一線に増加した様であるが、その他の部署、即ち義統の麾下を如何にしたか。その兵力及び行動に就いては記録にないようである。吉弘統幸の指揮する第一陣と宗像鎮次の第二陣とが敵の第一陣、第二陣を突破し更に松井・有吉の一隊を撃退し戦機まさに熟した時に、義統は使いを遣して統幸に旧陣地に撤退を命じたのは返す返すも大友軍の為に遺憾である。義統は果たして堅確なる自信の下にこの戦闘を指揮していたであろうか。

当時密集戦法の原則として、兵力は逐次戦闘に加入せしめられたのであるけれども、総指揮官としては苟も戦闘開始に先立ち、部下全兵力を以て何時でも戦線に投入んで一挙に勝敗を決するの準備がなければならぬ。然るに義統は我が軍の為に最も有利な戦機を逸してしまったの

である。何れにせよ義統の決心の動揺は、この戦闘に於いて部下将士に、確固たる行動の憑拠を与えないで全般の指揮を不徹底ならしめた。

戦闘綱要草案に「勝利は自ら勝ちを信ずる者に帰す」と示されているのは、指揮官たるものの常に銘すべき金言である。

黒田軍の井上九郎右衛門の戦線加入の時期はやや遅かった様にあるが、幸にして勝利は得たけれども、この最後の戦闘に於ける勝敗は両軍五分五分であった。もし、井上が友軍の第二陣が撃退せられ、敵の隊伍未だ整わざる時期に実相時山にあった松井、有吉の二百余騎と策応して、井上九郎右衛門の主力が角殿山の西側から敵の左翼方面を索めて戦線に加入したならば、勝利の公算は一層確実であったと思われる。併しながら当時密集戦法時代に於ける所謂「戦の懸引」は、今日我々が想像し得ない呼吸があったことは勿論であるから、妄りに評論することは必ずしも当たらない。

#### 四、吉弘統幸と井上九郎右衛門

吉弘統幸は、此の戦闘に於ける花形役者である。彼は初め義統が秀頼に味方するのを大極上不利と見て、義統を諫めたけれど用いられなかつたので、不成功を知りつつこの戦闘に加わり義統の為に無二の忠勤をつくしたのであった。

吉弘嘉兵衛は、義統の前に進み出て涙を拂いて曰、臣は累代厚恩を蒙り死を以て君恩に報んと存すれ共、是度の戦はたとえ一旦の利を得るも、後の利運とは成難し。臣今軍備の中に入

り再び帰らず。然らば今君の尊顔を拝するも現世の御名残に候と、又涙を揮て拝謝し去る

〔豊州乱記〕

統幸が奮闘の結果、克ち得た戦勝もこれを有利に活用しなかつた為に、彼の大なる努力も水泡に帰した。この際義統が、再三使いを以て統幸に後退を命じたにかかわらず、統幸は必死を期して退却しなかつた。義統にしてこれを動機としてその控置していた全兵力を放って一挙に決戦を求めたならば、まだ勝利の見込みがあつたかも知れない。然るに義統は吉弘を討たすなと四、五百余騎を以て増援させたところえ、黒田軍の井上九郎右衛門が全力を挙げて突進したので、ここに両軍の最後の決戦になつた。

この最後の決戦は、言わば黒田軍から強いられて止むを得なかつたもので、大友義統の元来の意志ではない。即ち、吉弘統幸が義統の命を奉じなかつたことは事実になつて義統の意図以外の決戦を惹起し、戦術上所謂前進哨の害を起こしたものと云わねばならぬ。

統幸の誠忠については我々に深き感動を与える。唯第三者として冷静に観た時に、統幸の行動が最初からやや悲観的ではあるまいか。

たとえ統幸としてこの戦闘に於いて勝利を得ても、大局に勝算のない事を洞察していたにせよ、苟も軍に従う以上は最大の努力を以て斃るる迄積極的であらねばならぬ。それがこの場合統幸として、義統に対する奉公である。この点から観て統幸は或は死を急ぎ過ぎたのではあるまいか。彼の死は実にこの戦争の運命を決する動機となつたのである。

井上九郎右衛門が角殿山から戦闘に加入するにあたり、自ら挺進して敵情を偵察した結果、大友軍が芝生に下りて必死の戦闘を期している所を判知し、これに対応するため部下に下馬を命じて突進したのは、如何にも老練な指揮ぶりである。当時一般の原則とせられた乗馬攻撃を敵情によって忽ち徒歩攻撃に変えた所に、生きた戦術の活用が窺われる。

井上九郎右衛門が吉弘統幸に与えた致命傷は、彼の左の脇に突いた槍であったが、このことにつき多くの記録には、最初井上が十文字の槍の横手で統幸の胄の緒を切った為に、胄が顔にかかって自由を失った隙に突いたと載せてある。元来統幸と九郎右衛門とは文禄駅役朝鮮以来の知己であり、又某書には義統が封土を没収せられた後、統幸の一時中津に身を寄せて井上と懇意であったとさえ見える。この兩人の間で互いに私怨でなく主君の為に敵味方となったものである。特に当時統幸は朝来の奮戦で疲れている。かくの如き場合の井上のやり方としては武士道に欠けていると言わねばならぬ。併し井上は小兵であった為大兵の統幸にしばしば苦しめられていた際だから、この機会を逸しては或は統幸に対し勝利の見込みがなかったのによることもあったであろう。

##### 五、主将の行動が戦闘に及す影響

密集戦法の時代に於いては、主将の活模範は戦闘指導上極めて重大なる意味を持っている。

故に主将は単に指揮術に熟練するのみならず、自ら個人として武器の使術に長じ、自ら陣頭に立って突入した。主将が斃るれば部下は忽ち指揮の中心を失い、混乱に陥ることこの戦闘に於

り再び帰らず。然らば今君の尊顔を拝するも現世の御名残に候と、又涙を揮て拝謝し去る。

〔豊州乱記〕

統幸が奮闘の結果、克ち得た戦勝もこれを有利に活用しなかった為に、彼の大なる努力も水泡に帰した。この際義統が、再三使いを以て統幸に後退を命じたにかかわらず、統幸は必死を期して退却しなかった。義統にしてこれを動機としてその控置していた全兵力を放って一挙に決戦を求めたならば、まだ勝利の見込みがあったかも知れない。然るに義統は吉弘を討たすなと四、五百余騎を以て増援させたところえ、黒田軍の井上九郎右衛門が全力を挙げて突進したので、ここに両軍の最後の決戦になった。

この最後の決戦は、言わば黒田軍から強いられて止むを得なかったもので、大友義統の元来の意志ではない。即ち、吉弘統幸が義統の命を奉じなかったことは事実にして義統の意図以外の決戦を惹起し、戦術上所謂前進哨の害を起こしたものと云わねばならぬ。

統幸の誠忠については我々に深き感動を与える。唯第三者として冷静に観た時に、統幸の行動が最初からやや悲観的ではあるまいか。

たとえ統幸としてこの戦闘に於いて勝利を得ても、大局に勝算のない事を洞察していたにせよ、苟も軍に従う以上は最大の努力を以て斃るる迄積極的であらねばならぬ。それがこの場合統幸として、義統に対する奉公である。この点から観て統幸は或は死を急ぎ過ぎたのではあるまいか。彼の死は実にこの戦争の運命を決する動機となったのである。

井上九郎右衛門が角殿山から戦闘に加入するにあたり、自ら挺進して敵情を偵察した結果、大友軍が芝生に下りて必死の戦闘を期している所を判知し、これに対応するため部下に下馬を命じて突進したのは、如何にも老練な指揮ぶりである。当時一般の原則とせられた乗馬攻撃を敵情によって忽ち徒歩攻撃に変えた所に、生きた戦術の活用が窺われる。

井上九郎右衛門が吉弘統幸に与えた致命傷は、彼の左の脇に突いた槍であったが、このことにつき多くの記録には、最初井上が十文字の槍の横手で統幸の胄の緒を切った為に、胄が顔にかかって自由を失った隙に突いたと載せてある。元来統幸と九郎右衛門とは文禄駅役朝鮮以来の知己であり、又某書には義統が封土を没収せられた後、統幸の一時中津に身を寄せて井上と懇意であったとさえ見える。この両人の中で互いに私怨でなく主君の為に敵味方となったものである。特に当時統幸は朝来の奮戦で疲れている。かくの如き場合の井上のやり方としては武士道に欠けていると言わねばならぬ。併し井上は小兵であった為大兵の統幸にしばしば苦しめられていた際だから、この機会を逸しては或は統幸に対し勝利の見込みがなかったのによることもあったであろう。

##### 五、主将の行動が戦闘に及す影響

密集戦法の時代に於いては、主将の活模範は戦闘指導上極めて重大なる意味を持っている。

故に主将は単に指揮術に熟練するのみならず、自ら個人として武器の使術に長じ、自ら陣頭に立って突入した。主将が斃るれば部下は忽ち指揮の中心を失い、混乱に陥ることこの戦闘に於

ける吉弘統幸の戦死が明らかにこれを示していると共に、主人が討たれると部下がこれに殉じて戦死した涙ぐましい記録は、各戦闘に多く残っている。当時の主将と部下との関係から考えて左もあつたことと思う。

爾後戦闘の方式が変化して、今日に於してはたとえ一兵となつても戦闘終局の目的に鑑み動作せねばならぬ。所謂各兵卒に至る迄自覚を与え独断させることが愈必要になつた、と同時に指揮官に対する要求に於いては毫も昔と変わらない。最近戦役に於ける将校下士卒との死傷率の統計は、欧州大戦に至る迄指揮官の死傷が漸次大きになつたことを示し、何れも敵の指揮官を求めて狙撃しようと努めている。

この傾向に於いて指揮官としての責務の重大を知ると共に、上下を通じて国民としての責務を自覚せねばならぬ。主将が討たれて部下が帰趨する所にまよう様では、今日の戦闘は到底勝つことが出来ないのである。戦闘綱要草案に示されてある次のことは、古今を通じて一貫している。

指揮官は軍隊団結の核心にして、其態度は軍の志気を緊持し、且之を振作するに特に重要な關係を有するものとす。故に指揮官は当時士卒と苦楽を俱に、し率先躬行軍隊の儀表として、其尊信を受け、剣雷弾雨の間に立ち勇猛沈着にして部下をして仰ぎて山嶽よりも重きを成さしめるべからず。

〔完〕



この「石垣原の戦闘」は別府市立図書館蔵の「大分聯隊区管内に於ける 郷土戦史の研究・第一輯」（昭和二年十一月十五日帝國在郷軍人会大分支部発行）を原本にした。

なお、本文の旧仮名遣は現代仮名遣になおしたが、引用史料については原則として原文のままとした。

石垣原合戦は、郷土の近世の幕開けであり、通史にダイナミックにつながる事件であることなどから、別府の郷土史を研究するものにとってもっとも興味深い素材である。この合戦の史料は散在するが、黒田や大友のどちらかに立った偏ったものがおおく、客観的に書かれていると考えられるものが少ない。この「石垣原の戦闘」は戦前に作戦を専門とする軍事関係者が編んだもので、一応是とするものと考えられる。ただし、「増補大友興廃記」を主たる史料としていることにやや不安が残る。

なお、挿入された図は本書では赤・黒・青の三色刷りであるが、それぞれ工夫して一色刷りの本書に転載した。